

ドゥルーズ哲学と言語の問題

『千のプラトー』におけるイェルムスレウ言語学の意義と射程

小林 卓也

要旨

本稿の課題は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズと、精神分析を専門とするフェリックス・ガタリとの共著『千のプラトー』（1980）に見いだされる言語観の内実とその射程を明らかにすることである。彼らが端的に述べているように、「あらゆる言語（langue）は本質的に非等質的な、混合した現実である」。しかし、チョムスキーによる生成文法を念頭に置きながら、言語学はこうした言語現象の多様性に目を向けようとせず、文法規則や言語の等質的体系性を抽出することだけに終始しており、そこには、われわれの多様な言語活動を均質化し規格化することで、自らの科学性を担保する政治的関心しかないと彼らは批判する。ここには、言語を異質な要素からなる多様体とし、その多様性をいかに捉えるのかという彼らの企図が明瞭に現れている。本稿は、こうした彼らの言語観がどのような問題意識と結びついているのかを以下の手順で明らかにする。

まず、『千のプラトー』において彼らがジョン・L・オースティンの発話内行為に見出した論点を確認し（第一章）、それが60年代のドゥルーズ哲学の延長上にあることを指摘する（第二章）。というのもドゥルーズこそ、言語の本質を、身体や行為といった物理的なものと、それによって表現される意味や出来事といった非物理的なものの二元性という論点から考察していたのであり、『千のプラトー』の主眼は、その言語の二元性の接続をいかに捉えるのかということにあるからだ。こうした論点からすると、注目されるべきは『千のプラトー』においてルイ・イェルムスレウが占める役割である。イェルムスレウ言語学における表現と内容の連帯性、および形式と実質という概念の導入は、言語における二元性への問いに一定の回答を与えている（第三章）。最後に、彼らの議論がいわゆる言語理論の枠内に留まることなく、とりわけ彼らがミシェル・フーコーと共有するある歴史認識と結びついていることを確認し、その理論的射程を特定したい。

キーワード：ドゥルーズ、イェルムスレウ、言語の二元性、表現と内容、形式と実質

はじめに

「あらゆる言語（langue）は本質的に非等質的な、混合した現実である」（MP 117）。これはあまりにも自明のことがらである。音声言語に限ったとしても、なにかしらの発話をするためには、発達した口蓋や咽頭、喉頭などの身体器官が必要である。まして、発話を行うあいだは、呼吸器から空気を送り出すべく、一定時間、胸部を収縮させ、他の筋肉を弛緩させる必要がある。さらに、この高度に発達した有機体としての身体は、幾世代にもわたって受け継がれてきた遺伝的連鎖の帰結に他ならない。注目すべきことに、人間だけが外側にめくれた内胚

葉性の粘膜である唇を持ち、人間の雌だけが乳腺の発達した乳房を持っている。これはすなわち、人間においてのみ「言語の習得に好都合のように延長された哺乳期間によって、乳房(sein)の上での唇の、唇の上での乳房の相補的な再領土化が行われている」(MP 80)ということだ。これらを考慮すれば、言語というものが、物理的・身体的な要因のみならず、歴史文化的あるいは環境的な、いわば無数の要因から成り立っていることは明らかであろう。本稿が対象とするのは、言語をこうした異質な要素からなる多様体として追及し続けていたフランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze 1925-1995) である。

ところで、言語が異質な要素からなるということを「事実」として認めながらも、言語学はそこから「理論上、科学的研究を可能にする抽象化と理想化の条件として等質的または標準的な体系を切り取るのだと主張する」(MP 117-118)。だからこそドゥルーズは、精神分析家であるフェリックス・ガタリ (Félix Guattari 1930-1992) とともに著した『千のプラトー』(1980)において、音韻論や形態論をはじめ、こうした科学的言説としての言語学を批判するのだ。言語学は、文法規則や言語の等質的な体系性を抽出することだけに終始し、言語現象の多様性を決して理解しようとしない。言語学には、われわれの多様な言語活動を均質化し規格化することで、自らの科学性を担保する政治的関心しかないと彼らは批判する。

ドゥルーズとガタリの関心は、こうした言語学とは反対に、異質な諸要素からなる多様性としての言語をいかに捉えるのかということに向けられる。言うまでもなく彼らは言語学者でも記号論者でもない。しかし、彼らが提示している言語観は、「言語とは何か」「記号とは何か」といった根本的な問いをわれわれに要求するように思われる。本稿の目的は、彼らの特異な言語観がどのような問題意識と結びついているのかを明確にすることで、それが及ぶ射程を理解することにある。

1. 『千のプラトー』における言語観

本節では、『千のプラトー』に散見するドゥルーズとガタリによる言語学批判を手掛かりに、彼らの言語理解の特異性を確認する。すでに述べたように、彼らの言語学批判は、とりわけ、チョムスキーによる生成文法に見出されるような、多様な言語現象から一定の恒常的な規則性や関係性を抽出することに専心するその政治的側面に向けられている。

文法的に正しい文章を作ることは、普通の人にとって、社会的な法に完全に従属するための前提なのだ。誰も文法性を無視するとはみなされておらず、それを無視する者は特別な制度に属する。言語の統一性とは、何よりもまず政治的なものだ。(MP 127-128)

言語学が一科学であるために要請するのは、言語の不変的な構造的性、ラングとその実際の運用

としてのパロールという二分法、あるいはこうしたラングを運用する諸個人における能力の普遍性である。これらに基づき、言語活動のなかから有意性のない変数が排除、処理され、そこから抽出された不変項が標準言語やメジャー言語として規定される。そして、母語や標準語において現れる文法の規則性が話者に強制されることで、既存の社会的秩序に従う主体を構成し、その主体が担うべき社会的役割を指定する。したがって、未だ文法に習熟していない幼児や、通常文法性を逸脱した言語を用いる狂人は社会から排除され、学校や病院といった「特別な制度」に收容され訓育されるべきであるとされる¹⁾。この意味で、「言語を研究対象とする科学的モデルは、それによって言語が自らのために等質化され、中心化され、標準化されるような政治的モデル、メジャーまたは支配的な権力の言語と一体をなしている」(MP 127)とドゥルーズとガタリは指摘する。そして、彼らが着目するものこそ、こうした「権力の目印」である言語学が取り逃がす言語活動 (langage) のある側面に他ならない。

発話内行為における発話と行為の結びつき

ドゥルーズとガタリは、ジョン・L・オースティンの言語行為論、とりわけ、発話内行為に関する議論を参照する。周知のようにオースティンは、ある言表(言明)の発話が、単に事実を叙述するだけではなく、発話を行うことが直ちに疑問、宣言、命令といった行為を伴うことに着目し、これを発話内行為 (illocution) と呼んだ。ドゥルーズとガタリは、この発話内行為において問題となっているのは、もはや言表と言表の関係でもなければ、言表と言表に外在する行為との関係でもなく、「パロール [発話行為] (括弧内は引用者挿入) に内的な行為、言表と行為との内在的な関係」(MP 98) であると指摘する。なぜなら、疑問文を発話しながら質問し、命令文を発話しながら命令するように、発話内行為においては発話と行為が切り離せず、緊密に結びついているからだ。疑問、宣言、命令といった発話行為 (parole) は、単に発話者の意図や情報を伝達しているのではない。その主眼は、発話に「特定の、内在的な、必然的に暗黙的な行為を遂行する」(MP 98) ことにある。こうした観点からすると、発話を、社会的規約としてのラングの単なる個人的行使であるとする従来の言語学的な区別²⁾ は意味をなさない。むしろ、究明されるべきは、「あらゆる語あるいは言表と、暗黙的な諸前提との関係、すなわち、言表において実行され、言表においてしか実行されえないパロールという行為との関係」(MP 100) であるとドゥルーズとガタリは指摘する。では、この言表と行為の内在的な関係とは何か。彼らが挙げているハイジャックの場面を例にとる。

指令語における非身体的変化

旅客機のハイジャックにおいて、犯人の威嚇、乗客への暴行や傷害は文字通りひとつの行為であり、それは異なる身体間における能動と受動である。しかし、それらの行為によって乗客は瞬時に人質へ、機体は瞬時に牢獄へと変化する。これは決して物理的な変化ではない。この

瞬間的な変化は、犯人の威嚇行為によって引き起こされた非物体的、非身体的変化である。また威嚇行為は、機体や乗客にあらかじめ備わっている性質や状態を指示しているのではない。そうではなく、威嚇行為は、その行為にのみ内在する人質と牢獄という非物体的属性を表現し、それを物理的な身体（物体）に帰属させることで、固有の質料を生成させている。「つまり、発話内行為は、言表と、言表が表現する非身体的変形、あるいは物体的ではない属性との瞬時の関係を示すのである」（MP 103）。この例から理解されるのは、発話は言語的規則の単なる個人的使用以上の機能を果たすということ、そして、より重要なことに、この発話行為に先立って、あらかじめ発話する主体やその対象があるわけではないということだ。犯人の威嚇行為は、乗客や機体の非物体的変形を引き起こすが、同時に、他ならぬ犯人自体の主体化もまたこの行為の帰結であるからだ。ドゥルーズとガタリの主張は、語彙や文から成る非人称的で社会的・集団的な言表と、今、此处において日付をもつその発話行為の方が、「その帰結として、主体化の相対的な過程や、個人性の割り当て、言説のなかへのそれらの流動的な配置を決定することになる」（MP 101）ということである。

こうした瞬間的な非身体的変形を生じさせる発話内行為をドゥルーズとガタリは「指令語 (les mots d'ordre)」と呼ぶ。そして、発話がその効果として言表の主体を生み出すようあらかじめ規定された言表と発話の暗黙的で内的な関係を「集団的アレンジメント (agencements collectifs)」と呼び、ここに言語活動の本質を見出している。指令語において重要な役割を果たしているのは、言語学が想定する統語論的規則や構文論的規則などではなく、音調やアクセント、あるいはイントネーションといった、われわれの身体的運動やわれわれを取りまく環境に直接関連する要因である。したがって言語の本質は、むしろ統語論的規則や構文論的規則から外れる要因、「非弁別的、語用論的、様式的、プロソディ的な特性」（MP 131）に探し求められなければならない。これが『千のプラトー』において「語用論 (pragmatique)」が高く評価される理由である。そして、ドゥルーズとガタリの企図は、この語用論を、あらゆる統治権力の支配を逃れ、それらを解体する可能性を見出すための権力分析に不可欠な理論装置として提示することにある³⁾。言語を争点とする政治性に関する彼らの議論については稿を改めて論じるとして、本稿が考察したいのは、こうした彼らの特異な言語観がどのような哲学的な議論に依拠しているのかということである。

2. 言語における身体性と非身体性

『千のプラトー』において提示された言語観は、言語の本質をその非物体的変化に見出している。しかし、この非物体的変化、あるいは非物体的属性を引き起こすのは、行為や発話といった身体的要因である。すなわち、物体や身体の非物体的変化は、まさに物体や身体を原因とする結果(効果)に他ならない。そして、言語と身体を巡るこの逆説的な関係について、ドゥ

ルーズはきわめて早い時期から自覚的に言及していた。本節では、『千のプラトー』へと連なる主題を60年代のドゥルーズ哲学に見出し、それがどのような議論であったのかを確認しよう。

ストア派における出来事概念

能動と受動からなる物理的身体から、それによって表現される非物体的属性を区別することで「最初に言語哲学を作り上げた」(MP 109)として、『千のプラトー』ではストア派の名が挙げられているが、それはまたドゥルーズの単著である『意味の論理学』(1969)の主要な対象でもあった。ドゥルーズはそこで、エミール・ブレイエの著作を参照しつつストア派に次のような議論を見出していた。すなわち、ナイフが肉を切るのは、ナイフと肉といういずれも物理的な事物間の能動と受動であるのに対し、「ナイフが肉を切る」という命題によって表現されるものは、「切られる」という属性、出来事であって、これを事物や事物の性質に還元することはできない。なぜなら、現実的に実在するのは、未だ切られていない肉と切られた肉という物理的な事物だけであって、「肉が切られる」という出来事はそのいずれにも属してはいないからである。ストア派は物理的な事物から区別されるこうした属性や出来事を言表可能なもの(lekton)と呼ぶが、ドゥルーズはこれを高く評価する。というのも、ストア派による出来事の議論は、プラトン主義的なアイデアのような超越性とも、唯物論的な物質の実在性とも異なる非物体的なものに固有の存在様式を提示しているからである。「前ソクラテス主義者とプラトンに同時に対抗するストア派の大発見は、高所と深層から独立し、高所と深層に対抗する、表面の自律である」(LS 157-158)とドゥルーズは述べている。

これと同様の議論は、『差異と反復』(1968)においても命題と意味との関係として言及されているが、そこにおけるドゥルーズの企図もまた、そうした属性や出来事、意味などの、命題によって表現されるもののあり方、存在の仕方を、指示対象(例えば別の命題による指示)や事物の状態に還元することなくいかに思考するのかということにある⁴⁾。それはいわば、現実的な存在者にも、存在者を超越した存在そのものにも還元しえない出来事であり、その特異な存在について語りうる存在論を構築することが60年代のドゥルーズ哲学の主題であったと言えるだろう。

身体と出来事をつなぐ「表現」の論理

しかし、ドゥルーズ哲学における言語の問題という論点からわれわれが着目すべきは、ドゥルーズが語と存在、物理的事物と出来事、命題と意味のあいだに見出している「表現」の論理である。『差異と反復』の議論を参照する。たとえば「神は存在する(Dieu est)」という命題によって表現されるものを、当の命題からも、対象としての神からも区別するために、ドゥルーズは動詞の不定詞、あるいは現在分詞を用いて、「神-存在する(Dieu-être)」、ないし、

「神-あり (Dieu-étant)」と表記することを提案し、その存在のあり方について次のように述べている。

それ〔「神-存在する」「神-あり」と表現されるような存在〕は、客観的存在体 (une entité objective) であるが、それがそれ自体で実在する (existe) と言うことさえできない。そうした存在体は、準-存在、超-存在を持ちつつ、すなわち、現実的で可能な対象と、不可能でさえある対象に共通の最小の存在を持ちつつ、存立する (insiste) のであり、持続する (subsiste) のである。(DR 202)

指示対象のない命題や、「四角い円」のような矛盾命題でさえ、無意味ではないという意味においてそれらが共通に持つ最小の存在をドゥルーズは「意味」と言い換える。ならば、命題の意味は、それを表現する命題とも、事物の状態とも混同されない何か(aliquid) (LS 34)であり、それ自体が独自の対象性を持っていると言いうるだろう。しかしより重要なことは、そうした存在や意味が存立し、持続しうるのは、それを表現する命題のなかにおいてのみであって、「それを表現する命題の外では実在しない」(LS 33)と指摘されていることである。

表現されるものは、その表現の外では実在しない。それゆえに、意味は、実在するとは言われえず、ただ、存立する、あるいは、持続すると言われうる。(LS 33)

命題によって表現される意味とは、その表現である命題のなかに存立し、持続する。ここから理解されるのは、ドゥルーズが、命題と意味との関係を表現によって結び付けることで、それを外延指示や意味作用とは別の仕方では捉えようとしていることだ。したがって、ドゥルーズがストア派に見出した出来事、特異な対象性を持つその存在は、「本質的に言語に帰属し、言語と本質的な関係にある」(LS 34)と言われることになる。これが『意味の論理学』の根本的なテーゼであった。

さらに、『差異と反復』の副論文である『スピノザと表現の問題』(1968)は、スピノザ哲学における実体、属性、様態のなかに同様の「表現」の論理を見出していた。すなわち、自己原因である実体は存在(存在すること)を本質として含んでいるが、そうした「実体の本質は、それを表現する属性の外には存在せず、したがって、各々の属性は永遠で無限なある本質を表現する」(SPE 34)。これがドゥルーズのスピノザ論の要点であると同時に、『差異と反復』における命題と存在、『意味の論理学』における物理的事物と出来事の議論に対応している。このように、命題、身体、行為といった物理的秩序と、出来事、意味、存在といった非物理的秩序を区別し、それら異なる秩序のあいだの相互的關係を「表現」として捉えるという論点は、60年代のドゥルーズ哲学に顕著な特徴であったと言えるだろう⁵⁾。そしてこの問題意識は、『千

のプラトー』の言語観にも明らかに反映している。とりわけそれは、ドゥルーズとガタリによるイエラムスレウに対する評価において顕著に現れるだろう。

3. 『千のプラトー』におけるイエラムスレウ言語論

言語の本質を身体的・物的な原因と非身体的属性の二元性において捉え、それら二つの側面の相互性を思考することは、60年代のドゥルーズ哲学に一貫したテーマであった。注目すべきことに、『千のプラトー』では、この「非身体的変形、非身体的属性は、身体それ自身について言われるものであり、身体それ自体についてのみ言われる」(MP 110)という点を付け加えないのならば、ストア派の議論には価値がないと指摘されている。すなわち彼らの関心は、明らかに言語における物的秩序と非物的秩序の相互性に向けられている。そして次の引用からも理解されるように、『千のプラトー』では、それら異質な二つの秩序がどのように連結されるのかということにより重点が置かれ、それらを結ぶ論理が探求されることになる。

身体、あるいは事物の状態は、記号の「指示対象」であるとさえ言えない。非身体的な属性を表現し、また同時にこれを身体に帰属させることによって、人は表象するのでもなく、指示するのでもなく、いわば介入する (intervient) のであり、これが言語活動という行為なのだ。(中略) 表現、あるいは表現されるものは内容のなかに挿入され、内容のなかに介入する。それは内容を表象するためではなく、内容を先取りし、後退させ、緩慢にするためであり、あるいはそれを加速させ、分離ないし結合し、別様に切断するためである。(MP 110)

身体や行為と、それによって表現される非身体的属性との関係は、一方が他方を指示しているわけでも代理しているわけでもない。そうではなく、表現と内容が介入しあい、互いが相互に変容する動的な関係こそが言語活動に他ならないとドゥルーズとガタリは指摘している。ここで問題となるのは、表現と内容という概念上の区別が新たに導入されたことであり、これによって物的秩序と非物的秩序の相互性が「表現」ではなく、相互介入という論点へと深化されたことである。ここでドゥルーズとガタリが念頭に置いているのは、コペンハーゲン学派の創始者のひとりであるルイ・イエラムスレウ (Louis Hjelmslev 1899-1965) である。イエラムスレウの言語学、いわゆる言理学 (glossématique) が彼らの言語観の基底にある。

イエラムスレウ言語学における表現と内容の連帯性

イエラムスレウは『言語論序説』(1943)において、ソシユールによって区別された記号の二側面、すなわち、語の音響イメージであるシニフィアン (signifiant 意味するもの) と、そ

れに結びつく観念であるシニフィエ (signifié 意味されるもの) という区別を踏襲し、前者を表現 (expression), 後者を内容 (contenu) と呼びかえる⁶⁾。イェルムスレウが強調するのは、表現と内容の連帯性である。

表現と内容は連帯しており、必然的にお互いが前提し合っている。表現はそれが内容の表現であるということによってはじめて表現なのであり、また内容はそれが表現の内容であるということによってはじめて内容なのである。(Hjelmslev 2009: 66-67)

ソシュールがすでに指摘していたように、語によって表現されるその内容とは、言語外的な指示対象ではなく、それはあくまで観念や心的概念である。では、イェルムスレウの言語学において、表現に連帯する内容はどう理解されるのか。

いくつかの言語を比較すれば、語や文の形態、統語論的規則は各言語において異なるにもかかわらず、それらが何か共通のものを表現していることが分かる。この共通の要素、「無定形の塊」をイェルムスレウは意味(原意: *mening*, 仏語では *sens*, 英語では *purport* と訳される) ないし思考と呼ぶ。各言語はこの「まだ分節化されていない占在体 (*grandeur*)」を各言語に固有な仕方でも分節化し、固有の語彙、音韻規則によって表現する。すなわち、「われわれが〔文などの〕言語学的な連鎖から抽出しうる《形式化されていない》意味は、各々の言語において異なる仕方でも形を取る」(Hjelmslev 2009: 70)。たとえば、各言語において色を表す語彙を比較すれば、その内容が部分的に一致することもあれば、一方の言語における分節化が他方の言語には見いだされないことが分かるだろう⁷⁾。これはすなわち、「意味とは、さまざまな言語に従って異なる仕方でも秩序づけられ、分節化され、形式化される」(Hjelmslev 2009: 69) ということだ。「概念なき直観は盲目である」というカントの言葉に倣うかの如く、イェルムスレウが言うように、語ることのない思考は言語的内容ではないし、また反対に、思考を伴わない発話は単なる音の羅列でしかなく、それを聴者がなにかしらの内容に結びつけることがなければ、決して言語的表現とはならない。この意味で、言語において、表現とその内容は緊密に連帯しており、記号機能とは表現と内容のこの連帯性に他ならない。

表現と内容における形式と実質

言語学に、こうした表現と内容の区別を導入したイェルムスレウの企図は、「記号とは何か」という古典的な問いに回答を与えることにある。一般に記号とは、当該の記号に外在する何かを表すものであるとされる。たとえば、表現としての「木」という語、ないしその発話は、ある風景のなかで特定される対象を内容とする記号として機能する。この場合、記号が表す「何か」に対応するのは、外的な指示対象としての木である。しかし、外的事物として特定されるこの対象は、直ちに表現「木」の内容であるわけではない。なぜなら、外的事物としての実際

の木が、表現「木」というタイプのトークン、すなわちイエラムスレウの用語では「内容の実質」となるためには、それはたとえば、それを素材として私の家の戸口や犬小屋が作られる木のような、他の内容の実質とともに範列を作らなければならない。つまり、内容の実質はつねにその範列を規定する形式に結びついている必要がある。すなわち、「実質はもっぱら形式に依存しており、いかなる意味においても実質に独立した実在を与えることはできない」(Hjelmslev 2009: 68)。記号の内容は、内容の実質を範列化する、内容の形式を伴っているため、内容それ自体が実質と形式を持っているとイエラムスレウは主張する。

記号が何かの記号であるということが意味するのは、したがって、記号内容の形式は、その何かを内容の実質として理解することができるということである。(Hjelmslev 2009: 76)

さらに、同様の議論は、記号の表現面についても展開される。まず、「ある記号は、その表現の実質の記号である」(Hjelmslev 2009: 76)とイエラムスレウは言う。どういうことか。語「木」の表現面としての音「ki」は、今、此处において発話される限りにおいて表現の実質を成す。しかし、先述した内容の実質と同様に、表現の実質もまた、それがあある記号表現の実質であるためには、表現の形式に従っていなければならない。つまり、ある語の発話は、「その下で、その表現の他の実質の占在体（別の話者による、あるいは別の機会における、同じ記号の他の可能な発音）を集めることのできる表現の形式に結びついている」(Hjelmslev 2009: 76)のでなければ、単なる音の羅列あるいはノイズに過ぎず、記号表現の実質とはなりえない。つまり、記号の表現もまた、それ自体が相互に結びついた形式と実質を持っている。こうしてイエラムスレウは記号を次のように定義する。

記号とは、したがって、内容の実質であると同時に、表現の実質である。この意味で、記号は何かの記号であるということができる。(中略) 記号とは、二つの側面を備えた占在体であり、ヤーヌスの頭が二つの側面にパースペクティブを持つように、二つの方向に効果を持つ。つまりそれは、表現の実質の方へ《外側に》向かい、内容の実質の方へ《内側に》向かう。(Hjelmslev 2009: 76-77)

記号が表現する内容とは、外的な指示対象ではなく、内容面において形式化された実質であり、内容の形式は表現面における実質の形式化から切り離せない。このような表現と内容の連帯性、そして表現と内容それぞれにおける実質と形式による相互規定性。これがイエラムスレウの言語論の基本格子であり、『千のプラトーン』が最大限に評価するものである。というのも、ドゥルーズとガタリによれば、イエラムスレウの言語論は、「表現が内容のなかに挿入され、ひとつの特徴から他の特徴へと人が絶え間なく跳躍し、記号が物そのものに働きかけると同時

に、物が記号を介して拡張し、展開していく仕方を確立する」(MP 110)からである。身体と言語、すなわち身体的行為と非身体的属性や変化の相互性という60年代から継続されるドゥルーズ哲学の主要テーマに対して、表現と内容における形式と実質による相互規定性を導入するイエラムスレウの言理学はこのように一定の回答を与えているのだ。

結語に代えて——言語と歴史

言語は多様な要素を含んでいる。言語における身体・物理的側面を捨象して言語について語るべきではないし、まして、言語が表現するものを外的対象や発話主体の信念に還元するべきではない。言語の本質は、身体的行為としての発話によって引き起こされる非身体的変化にあり、言語によって表現されているものは、言語内における表現と内容の相互規定の帰結であるからだ。重要なことは、身体に非身体的な属性を帰属させる発話がどのような社会的な諸条件(集団的アレンジメント)に従っているのかを探求することであり、さらに、その発話内容は他のどのような表現と関連し、その内容をどの程度促進し、どのように抑圧しているのかを分析することである。そして、これらを理解することが言語について語ることに他ならない。われわれが60年代のドゥルーズ哲学を介して『千のプラトーン』における言語の問題に見出したのはこうした論点である。そして、この論点は、言語という枠組みを超えて、とりわけ彼らがフランスの哲学者ミシェル・フーコー(Michel Foucault 1926-1984)と共有するある歴史認識と結びついているように思われる。これを最後に確認しよう。

イエラムスレウ言語学とフーコーによる監獄の分析

イエラムスレウ言語学における表現と内容についての議論を、フーコーによる監獄の分析に適用した部分が、『千のプラトーン』のみならずドゥルーズの単著である『フーコー』(1986)においても見出される。そこで問われているのは、監獄とは何かということだ。監獄とは、特定の人物を一定期間にわたり収容する施設である。しかし、たとえば、「収容施設」が監獄の内容の形式を成すとすれば、それは同時に、学校、兵舎、病院、工場といった他の複数の内容の形式とも関連していることは明らかだ。さらにドゥルーズとガタリは、監獄という施設、あるいはその内容の形式は、直ちに「監獄」という語に結びつくのではなく、罪の重さや処置、その種類を分類する仕方を表現する「犯罪行為」のようなまったく別の語と概念に結びつく指摘する。「犯罪行為」とは、「監獄」という内容の形式と相互に前提し合う表現の形式である」(MP 86)。ここで批判対象として想定されているのは、監獄という語を外的な事物としての収容施設に還元したり、犯罪行為をシニフィアンとし、監獄をそれが意味するシニフィエに割り当てるとような短絡的な分析である。

要するに、互いに対応するものと仮定される語と物を対置することも、互いに適合するものと仮定されるシニフィアンとシニフィエを対置することも決してしてはならない。対置すべきなのは、不安定な均衡状態または相互的前提状態にあり、互いに区別される形式化なのである。(MP 87)

重要なことは、犯罪行為と監獄という表現と内容がそれぞれに独立して行っている形式化を明らかにすることであり、また、それが他のどのような形式と関連しているのかを理解することである。ドゥルーズが理解する限りでのフーコーによる分析の本質は、監獄や病院施設を可視的なもの、法や狂気あるいは性を巡る言説を言表可能なものとしてそれぞれ区別し、その各々が各時代においてどのように固有な仕方形式化され、どのように固有の主体や対象を生み出し、それらの社会的役割がどのように配置されているのかを明らかにしたことにある。

言語と歴史のア・プリオリ

こうした可視的なものと言表可能なものの配置の総体をフーコーはエピステーメー（知）と呼び、ドゥルーズとガタリはイェルムスレウに倣いそれを「地層」と呼ぶ。そしてまさに、そうした知や地層の変動こそが歴史を形成すると彼らは考える。「知は、それぞれの地層や歴史的形成に固有の、可視的なものと言表可能なものの組み合わせによって定義される」(F 58)。すなわちドゥルーズとガタリは、イェルムスレウ言語学とフーコーの歴史分析に方法論的な共通点を見出している。

ドゥルーズはこうしたフーコーの方法論を、「歴史を再生させるそれ自体新しい独特の哲学的な問い方」(F 56) であるとして評価するとともに、ここから「最大の歴史的原則」を引き出す。すなわちそれは、歴史には、知を構成する言表と非身体的変化、その実践的な組み合わせだけが存在するのであって、「知の背後には何もない」(F 58) ということだ。歴史を超えてつねに不変で同一である神や人間の形態、あるいはその本質など存在しない。ドゥルーズがフーコーの『言葉と物』を参照しつつ述べるように、古典主義時代における人間と神の形態は、無限と有限を巡る言説の配置の帰結であり、また、一九世紀における人間の形態は、生物学的な生と死を巡る言説によって語られる力関係の結果に過ぎない。「フーコーの一般原理とは、どんな形態も様々な力関係の組み合わせであるということだ」(F 131) とドゥルーズは言う。

各々の歴史的形成は、その可視性の諸条件に従って、可能なすべてのことを見、また見させるし、同様にその言表の諸条件に従って、可能なすべてのことを言うということだ。(F 66)

歴史において隠されているものなど何もないし、言語においてはすべてが与えられている。しかし、言表や非身体的変化は直接解読できるものではない。なぜなら、「物と言葉にとどまっ

ている限り、私たちは見ているものについて語り、語っているものを見ていると、また二つは結合している」と信じ込み、「経験的な実践にとどまったままである」(F 72)からだ。だからこそドゥルーズとガタリがイエラムスレウの言語学に読み取ったように、表現と内容を区別し、それらが各時代においてどのような体制や条件に従っているのかを明らかにすることが必要なのだ。

あらゆる概念や主体、行動様式といったものが、歴史的な形成の結果であるとすれば、歴史こそがわれわれの現実的な経験の条件である。この意味でドゥルーズは、「ア・プリオリなものとは歴史的である」(F 63)とさえ言う。少なくとも、こうした歴史のア・プリオリに至るには、言語が含む異質性や多様性を、何かしらの規則性や体系性に縮減するのではなく、その多様性そのものを、またそれに固有の論理を思考しなければならない。ドゥルーズ哲学が言語について問い続けるのは、言語の問題が、まさにこうした論点に届きうるような射程を捉えているからに他ならない。

注

- 1) もちろん、ここでは言語的な文法性だけが問題となっているのではない。文法性を規範と言い換えるならば、それが国語だけではなく、医療制度、行政、家族関係といったさまざまな領域において健常と異常を分節化する基準として機能していることは明らかだ。常識的な社会観において、とりわけ医療制度においていかに病人が外部へ排除されるとともに包摂されるのかについては、(小泉 2006)のパーソンズを中心に扱った第四章を参照のこと。
- 2) いうまでもなく、このラングとパロールの区別は、F.de. ソシュールの講義を編纂した『一般言語学講義』に端を発し人口に膾炙したものであるが、(Lecerclé 2002)も指摘するように、チョムスキーをはじめとする科学的言語学もまた、この区別を踏襲している。Lecercléはその特徴として以下の四点を挙げている。すなわち、(1) 言語の主たる機能として、情報とコミュニケーションを扱う、(2) 言語とそれ以外の現象、言語内において有意なものと有意でないものを分離し、「内的な」言語学を構築する、(3) 物理法則と同様に言語法則を公式化する、(4) 記号を研究するすべての言説の中心には、言語の科学があるとする(2002: 154)。
- 3) Cf. 「語用論は言語の政治学である」(MP 105)。ドゥルーズとガタリの狙いは、科学的な言語学やメジャー言語を破棄したり廃絶したりすることにあるのではない。彼らの主張は、それらが想定している文法構造の普遍性や定常性は、語用論が対象とするような身振り、音調的、非弁別的、(科学的言語学とは異なるという意味において)非言語的な要素の連続的な変化につねに晒され、むしろ依存して存立しているということである。その事例として彼らが挙げているように、全世界で用いられている標準英語や米語と呼ばれる言語が、完全に均質的・標準的な文法、語彙から構成されているわけではないことは明らかである。むしろ、英語や米語が世界的にメジャーな言語であるのは、黒人英語が米語を変化させ、ゲール語やアイルランド語が英語を変化させたように、世界のあらゆる少数民族による独自の変化、影響を受けた結果でしかないドゥルーズとガタリは考える。すなわち、メジャー言語とマイナー言語という区分はつねに相対的であり、また相関的であって、「内的、内因的、言語内的な少数派をもたない言語などない」(MP 130)と彼らは主張する。ドゥルーズとガタリが、チョムスキー言語学に対してウィリアム・ラボフの社会言語学を評価するのは、それがメジャー言語とマイナー言語、中心と周縁といったカテゴリーが、そもそも変転可能であることを示しているからである。そして、ドイツ語で書くチェコのユダヤ人であるカフカが、真に偉大な作家として高く評

価されるのも、カフカの文学が、メジャーとされた言語の領域性や文化的・社会的機能を解体するような言語の使用法を創造する試みであるからだ。「彼〔カフカ〕が、定数を圧縮すると同時に変異体を拡張するために、変数の連続体を構築し、あらゆる変数と交渉することによって、マイナー言語を創造する処置を被らせるのはドイツ語に対してである」(MP 131)。ここでドゥルーズとガタリが強調しているのは、「マイナー」文学と呼ばれるものは、一から生み出されるものではなく、あくまでメジャー言語や母国語の内部において、それらを取り巻く他の社会的・政治的環境との相関的な交渉や変化に依存して生み出されるということである。「マイナーな作家は、自分自身の言語において異邦人である。彼が私生児であり、私生児のようにして生きるのは、諸言語の混成や混合によるのではなく、むしろ、自国語においてテンソルを広げることによる、自国語からの窃取と変異体によってである」(MP 133)。『千のプラトー』におけるこの議論は、ドゥルーズとガタリによる『カフカ——マイナー文学のために』(1975)のとりわけ第三章を中心にすでに展開されていたものであるが、その第九章においては次のように述べられていた。「新たな言表の生産の問題、そして、マイナーと呼ばれる文学の問題に戻ろう。(中略)ひとつの言表が独身者、あるいは芸術家の特異性によって生み出されるとき、その生産は、たとえ民族的・政治的・社会的な共同体の客観的な諸条件がさしあたっては文学的な言表行為の外側から与えられていなかったとしても、そのような共同体を媒介としてのみなされる」(K 149)。依然として、法や制度による社会的・集団的規定を与えられていない言表を、作家個人が既存の秩序の内部においてそれに先行して発することで、それが部分として機能する集団的な言表の連鎖を呼び起こし、既成の秩序を転倒させるということ、ここにドゥルーズとガタリは、マイナー文学における「革命性」を見出しているように思われる(cf. K 152-153)。

- 4) Cf. (DR 201-202)
- 5) 『意味の論理学』における、精神分析家メラニー・クライン (Melanie Klein 1882-1960) の議論のいささか安直な援用もまた、その主眼は、言語的秩序に対する身体性の位置づけという問題にある。クラインによる幼児の精神分析が明らかにしたことは、言語習得以前の幼児は、部分対象としての食物や糞便の摂取、投射によって構成される分裂病態勢から、攻撃衝動が弱まり、自我形成がなされる抑鬱態勢へと至る発達段階を経るというものだ。この議論と共に、アントナン・アルトール (Antonin Artaud 1896-1948) のような分裂病者の言語のなかにドゥルーズが見出したことは、言葉と物、命題と意味を分節化している境界ないし表面は、つねにそうした身体的・物理的な秩序に晒され、いつでも崩壊しうるものであるということである。
- 6) Cf. (Badir 2004: 104)
- 7) 「フランス語の“vert” (緑) によって覆われるスペクトルの領域は、ウェールズ語では、フランス語の“bleu” (青) によって覆われる領域にその一部が関わる線によって交わり、また、“bleu” (青) と“gris” (灰色) とのあいだにフランス語が引く境界線はウェールズ語には存在しない。」(Hjelmslev 2009: 71)

参考文献

ドゥルーズの単著およびドゥルーズとガタリの共著からの引用は、以下の略号、引用頁数の順に記す。また、邦訳を適宜参照しているが、文脈上変更を加えている。

- SPE: Deleuze, Gilles. (1968) *Spinoza et le problème de l'expression*, Paris, Minuit. [邦訳: ジル・ドゥルーズ (1997) 『スピノザと表現の問題』, 鈴木雅大訳, 法政大学出版局。]
- DR: Deleuze, Gilles. (1968) *Différence et répétition*, Paris, PUF. [ジル・ドゥルーズ (2007) 『差異と反復 上・下』, 財津理訳, 河出文庫。]
- LS: Deleuze, Gilles. (1969) *Logique du sens*, Paris, Minuit. [ジル・ドゥルーズ (2007) 『意味の論理学 上・下』, 小泉義之訳, 河出文庫。]
- K: Deleuze, Gilles. et Guattari, Félix. (1975) *Kafka*, Paris, Minuit. [ジル・ドゥルーズ/フェリックス・

- ガタリ (1979) 『カフカ——マイナー文学のために』, 宇波彰ほか訳, 法政大学出版局。]
- MP: Deleuze, Gilles. et Guattari, Félix. (1980) *Milles plateaux*, Paris, Minuit. [G. ドゥルーズ・F. ガタリ (2010) 『千のプラトー 上・中・下』, 河出文庫。]
- F: Deleuze, Gilles. (2004) *Foucault*, Paris, Minuit. [ジル・ドゥルーズ (2007) 『フーコー』, 宇野邦一訳, 河出文庫。]
- Badir, Sémir. (2004) *Hjelmslev*, Paris, Les belles lettres.
- Hjelmslev, Louis. (2009) *Prolégomènes à une théorie du langage*, Paris, Les éditions de minuit. [邦訳: ルイ・イエルムスレウ (1985) 『言語理論の確立をめくって』, 竹内孝次訳, 岩波書店。]
- 小泉義之 (2006) 『病の哲学』, ちくま新書。
- Lecercler, Jean-Jacques. (2002) *Deleuze and Language*, Palgrave Macmillan.

※本稿は、科学研究費補助金（研究活動スタート支援）による研究成果の一部である。

Deleuze's Philosophy and Problems of Language: On the Meaning and Extent of Hjelmslev's Linguistics in *A Thousand Plateaus*

Takuya KOBAYASHI

Abstract

This paper aims to clarify the meaning and extent of the theory of language which appears in *Milles plateaux* (1980) by Gilles Deleuze and Félix Guattari. They affirm that the essentials of language consist in various elements provided by non-linguistic ones, and should be understood within a concept of diversity. To clarify problems underlying their theory of language, this paper proceeds as follows.

In the first chapter, the theory of the illocutionary act introduced by John L. Austin, which Deleuze and Guattari support in *Milles plateaux*, is described. The following chapter argues that their choice of Austin's linguistics theory is connected with Deleuze's philosophy in the 1960s, because both of them focus on utterances, that is, the roles of a physical act in language, opposed to the theories of other scientific linguists. Deleuze has tried to understand the essentials of language especially in terms of the duality consisting of the corporeal side and the incorporeal one, namely physical bodies or acts and sense or events expressed by its corporeal causes. Therefore, the third chapter clarifies the role ascribed to the linguist Louis Hjelmslev in this book. The solidarity between expression and content, or the distinction between form and substance in Hjelmslev's linguistics, answers to the questions concerning the duality of language. Finally, the theoretical extent reached by Deleuze and Guattari's conceptions of language is discussed in comparison to Michel Foucault's understanding of history.

Keywords: Deleuze, Hjelmslev, duality of language, expression and content, form and substance